

【古典文法 動詞 識別②】

問、次の文中にある傍線部の動詞の活用の種類と活用形を答えなさい。

- ① この児、さだめておどろかさんずらんと、待ちゐたるに、（宇治拾遺物語）
- ② 故郷の人の来たりて、物語すとて、「あづま人こそ、言ひつることは頼まれる、（徒然草）
- ③ ほのうち霧りたる朝の露もまだ落ちぬに、殿、歩かせ給ひて御隨身召して、（紫式部日記）
- ④ その日は、女君に御物語のどかに聞こえ暮らし給ひて、例の、夜深く出で給ふ。（源氏物語）
- ⑤ 所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、（方丈記）
- ⑥ 同じ所に住む人の、かたみに恥ぢかはし、いささかのひまなく用意したりと思ふが、（枕草子）
- ⑦ 左右の大臣に世の政を行ふべきよし宣旨下さしめ給へりしに、その折、左大臣、（大鏡）
- ⑧ 大納言なりける人、小侍従ときこえし歌詠みに通はれけり。（今物語）
- ⑨ ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ尼なりけり。（源氏物語）
- ⑩ 等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、（更級日記）
- ⑪ と申しければ、木曽、「さらば。」とて、栗津の松原へぞ駆けたまふ。（平家物語）
- ⑫ 守柄にやあらむ、国人の心の常として、今はとて見えざるを、心ある者は、（土佐日記）
- ⑬ 在り所は聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、（伊勢物語）
- ⑭ 祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、（平家物語）
- ⑮ と言ひて見出だすに、からうじて、大和人、「来む。」と言へり。（伊勢物語）

①	②	③
④	⑤	⑥
⑦	⑧	⑨
⑩	⑪	⑫
⑬	⑭	⑮

問、次の文中にある傍線部の動詞の活用の種類と活用形を答えなさい。

- ① この児、さだめておどろかさんずらんと、待ちゐたるに、（宇治拾遺物語）
- ② 故郷の人の来たりて、物語すとて、「あづま人こそ、言ひつることは頼まるれ、（徒然草）
- ③ ほのうち霧りたる朝の露もまだ落ちぬに、殿、歩かせ給ひて御隨身召して、（紫式部日記）
- ④ その日は、女君に御物語のどかに聞こえ暮らし給ひて、例の、夜深く出で給ふ。（源氏物語）
- ⑤ 所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、（方丈記）
- ⑥ 同じ所に住む人の、かたみに恥ぢかはし、いささかのひまなく用意したりと思ふが、（枕草子）
- ⑦ 左右の大臣に世の政を行ふべきよし宣旨下さしめ給へりしに、その折、左大臣、（大鏡）
- ⑧ 大納言なりける人、小侍従ときこえし歌詠みに通はれけり。（今物語）
- ⑨ ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ尼なりけり。（源氏物語）
- ⑩ 等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、（更級日記）
- ⑪ と申しければ、木曾、「さらば。」とて、栗津の松原へぞ駆けたまふ。（平家物語）
- ⑫ 守柄にやあらむ、国人の心の常として、今はとて見えざるを、心ある者は、（土佐日記）
- ⑬ 在り所は聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、（伊勢物語）
- ⑭ 祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、（平家物語）
- ⑮ と言ひて見出だすに、からうじて、大和人、「来む。」と言へり。（伊勢物語）

①	サ行四段・未然	②	サ行変格・終止	③	タ行上二・未然
④	ヤ行下二段・連用	⑤	マ行上一段・連用	⑥	マ行四段・連体
⑦	ハ行四段・終止	⑧	ハ行四段・未然	⑨	ワ行下二段・連用
⑩	サ行変格・連用	⑪	ハ行四段・連体	⑫	ヤ行下二段・未然
⑬	カ行四段・已然	⑭	ラ行変格・終止	⑮	カ行変格・未然